【第三種郵便物認可】 【月ぎめ購読料4,509円（うち消費税334円）・一部朝刊160円、夕刊70円】 日本経済

夕刊文化

こころの玉手箱 3

歴史学者
山内 昌之

伊福部昭のアルバム

伊福部の生誕から1世紀を迎えた

日本が誇る大陸的感性

2014年は、第1次世界大戦勃発から100年にあたる。同時に、私個人の関心は、伊福部昭の生誕から1世紀を迎えたことだ。

伊福部は映画「ゴジラ」の主題音楽作曲家として有名だが、初めは東京でなくボストンやパリで認められた独学の芸術家だったことを知る人は少ない。

「ゴジラ」は、代表作の一つ「ヴァイオリンと管弦楽のための協奏風狂詩曲」の一部からの転用である。私は、生誕百年記念アルバムのCD（キング・インターナショナル）に収録された前橋汀子さんの演奏を聞きながら、伊福部の音楽に初めて接した時の背景を懐かしく想い出した。

伊福部の音楽を体系的に聞いたのは、1980年代末から90年代初めにかけてのことだ。当時はFMなどで現代音楽の特集があれば必ず録音もしていた。「土俗的三連画」や「交響譚詩」を聞いた時の不思議な感動は、子ども時分に心に浸透していた「ゴジラ」の旋律に似た感覚を経験したからだろう。

むしろ伊福部が「ゴジラ」の作曲家ということを知ったのは後のことだ。松井秀喜選手が東京ドームに登場し「ゴジラ」が流されると、何故に伊福部の音楽が、と訝しく感じたのである。私の場合は、伊福部が多用した北方民族アイヌやニブヒの躍動感を思わせる独特な原人類や多民族のリズム感覚に惹かれる方が最初であった。それは、私が当時しばしば発言を求められた民族やイスラームの問題への関心と重なる部分が多かったからだろう。

また驚いたのは、釧路の幣舞に生まれ音更で育ち、北大林学実科を卒業し、林務官となった伊福部の経歴だけではない。彼と同世代の札幌の若者たちから、音楽評論家となる三浦淳史、東洋美学にこだわり伝統的様式美を作曲で追求した早坂文雄が現れ、3人が切磋琢磨したことである。

伊福部は黛敏郎や芥川也寸志や松村禎三らを育て、早坂は武満徹に強い影響を与えた。現代音楽の流れを北の大地からつくった3人の書生っぽい議論も聴こえてきそうな伊福部生誕百年記念アルバムである。伊福部の大陸的自然の感性は、心の玉手箱を豊かにするエーテルというべきだろう。

（きり
生まれ。
木賞。著
賞）、「
ニカアル

もいいんだという捨て身の姿勢を大切にしています。
（聞き手は編集委員 中野稔）

バレエ

■ ボリショイ・バレエ「白鳥の湖」

情感表現深めたスター

ザハーロワ㊧とロヂキン㊨
＝写真 瀬戸 秀美

スヴェトラーナ・ザハーロワは、いわゆる〝舞踊の神に選ばれて生まれて来た〟バレリーナである。長い手脚の描き出す造形は息を呑むほどに美しく、冷たい美貌は高嶺の花そのもの。登場の瞬間から目を釘付けにするスター性もあり、新人の頃から幾度となく日本の観客を魅了してきた。だがその到達する情感の深みにおいては、今回のボリショイ・バレエとの「白鳥の湖」に匹敵するものは、かつてなかったのではないか。

花嫁選びを明日に控えた王子は、悪魔の導きで夢とも現実とも判然としない夜の湖畔にさまよい込み、白鳥の化身の乙女オデットと出会う。純白の衣装のザハーロワが羽ばたきながら天を仰ぐと、それはまさに、王子が希求する理想の愛そのもの。安全圏を遥かに超えたところでの強く引き絞られた踊りに、それだけでも陶然とさせられる。

だがさらに素晴らしいのは、規範を超えたとも思わせるその型の美の合間に、王子に預ける頭の角度、振り返る肩先の一瞬のためらいなどが表現する、じつに繊細な味わいが流れ続けていたことだ。古典バレエ屈指のこの名場面を、神秘に包まれた愛の情景として描ききったところに、現在の彼女の円熟を感じる。オデットそっくりに装った黒鳥オディールとして王子を誘惑する場面では、優雅、媚態、拒絶と猫の目のように表情が変わり、これもまた至芸の域。

日本での王子役はこれが初というデニス・ロヂキンは、気持ちが自然に音に乗った踊りで好演。アルテミー・ベリャコフの悪魔に背後から操られる男二人のユニゾンにも、不吉な緊迫感があふれた。劇場付きオーケストラ（パーヴェル・ソローキン指揮）の演奏も見せ場で肚に響き、名演を大きくもり立てた。11月24日、オーチャードホール。

（舞踊評論家 長野 由紀）

©宝塚歌劇団

で、東京宝塚
劇場。（河）